

## &lt;前期：キリスト教と近代的知&gt;

オリエンテーション——「キリスト教と近代的知」

- |                     |      |
|---------------------|------|
| 1. テイリッヒと近代的知       |      |
| 2. マクグラスと自然神学構想     |      |
| 3. テイリッヒとカント1       |      |
| 4. テイリッヒとカント2       | 5/18 |
| 5. マクグラス——自然神学と真理   | 5/25 |
| 6. テイリッヒとフィヒテ       | 6/1  |
| 7. テイリッヒとヘーゲル1      | 6/8  |
| 8. テイリッヒとヘーゲル2      | 6/15 |
| 9. マクグラス——自然神学と美    | 6/22 |
| 10. テイリッヒとシュライアマハー1 | 6/29 |
| 11. テイリッヒとシュライアマハー2 | 7/6  |
| 12. テイリッヒとシェリング1    | 7/13 |
| 13. テイリッヒとシェリング2    | 7/20 |
| 14. マクグラス——自然神学と善   | 7/27 |

**1. テイリッヒと近代的知****(1)キリスト教思想史とその課題****(2) テイリッヒと近代****3. テイリッヒとカント1****(1) キリスト教とカント**

1. 近代プロテスタント神学におけるカント  
ボンヘッファー：バルトとハイデッガー、20世紀の思想状況における教会論の再構築  
この問題状況を規定するカント以降の伝統
2. カントの形而上学批判の影響
3. 19世紀のドイツ哲学とプロテスタント神学の起点としてのカント
4. カントと人間学的転回  
波多野精一「宗教哲学の本質及其根本問題」（1920）：波多野宗教哲学の原型・原構想  
パネンベルク

**(2) カントと宗教論**

5. 全体としてのカント、カント哲学の全体的解釈  
カントの宗教論あるいは神と自由論から、カント哲学を全体として解釈するとどうなるか。  
・量義治『宗教哲学としてのカント哲学』勁草書房。  
・福谷茂『カント哲学試論』知泉書館。
6. シュヴァイツァー（1875～1965年）のカント解釈  
・Albert Schweitzer, *Die Religionsphilosophie Kant's Von Der Kritik Der Reinen Vernunft*, 1899.  
カント哲学における多層的な宗教哲学構想  
超越論的観念論（認識論）から宗教哲学の構築の試みとその問題性

→ 認識論の枠組みで倫理は基礎づけることができない。

↓

カント哲学の全体性とはいわゆる体系か？ あるいは別の形態の全体性か？

体系とは何か、体系概念の脱・再構築

## 7. ピヒトのカント解釈

Georg Picht, *Kants Religionsphilosophie*, hrsg. von Constanze Eisenbart in Zusammenarbeit mit Enno Rudolph, Klett-Cotta, 1985.

量義治

「ハイデッガーは、全巻と哲学の背後で駆動している「刺針」(Stachel)は「神あり」(»Gott ist. «) という命題である、と言い切っている。ゲオルグ・ピヒトの大著『カントの宗教哲学』はこのハイデッガーのテーゼを検証したものである。「カント哲学は全体として、またすべての個々の部分において、宗教哲学以外のなにものでもない」というのがピヒトのカント書の結論的主張なのである。」(17)

## 8. 理性宗教と実定宗教→「自律と他律」の対立図式

カントとドイツ観念論（初期のヘーゲル）が共有する啓蒙主義的理念に基づく宗教論  
理性宗教

## 9. 理性宗教の立場からの他律的な実定批判 → フォイエルバッハ・マルクスの宗教批判

カントと初期ヘーゲルのユダヤ教批判

（ヘーゲルはカントを乗り越えて行くが、ユダヤ教批判は残る）

イエスの宗教・理性宗教を妨げ、それを挫折させた実定的宗教

↓

カント哲学が『純粹理性批判』を超える宗教哲学の可能性をもっていたとすれば、カント自体に、対立図式を超える可能性を探ることができるはずである。

↓

## <議論の再構築>

### 1. Immanuel Kant, *Kritik der reinen Vernunft*

Des Kanons der reinen Vernunft

Zweiter Abschnitt: Von dem Ideal des höchsten Gutes, als einem Bestimmungsgrunde des letzten Zwecks der reinen Vernunft.

Alles Interesse meiner Vernunft (das spekulative sowohl, als das praktische) vereinigt sich in folgenden drei Fragen:

- |                                    |            |
|------------------------------------|------------|
| 1. Was kann ich wissen?            | → 『純粹理性批判』 |
| 2. Was soll ich tun?               | → 『実践理性批判』 |
| 3. Was darf ich hoffen? (B832-833) | → ?        |

### 2. カント哲学の全体構想：理性の事実としての自由、自律性の確立

『純粹理性批判』：批判哲学の方法論的基礎

『実践理性批判』：批判哲学のメイン・テーマである自由・自律性の核心部分

これらにおいて、最高善の徳と福の一致、そして神の存在と魂の不死性で、第三の問いも、基本的には答えられているとのカント解釈も可能であろう。

その場合、『判断力批判』は、美的判断と自然の合目的性への批判哲学の拡

S. Ashina

張、応用・適用と解釈できるかもしれない。啓蒙主義の哲学者カントとしては、以上で完結しているとも言える。とすれば、『宗教論』はいかなる意味があるのかが、問題化する。

3. 理性の基本的問いに、『純粹理性批判』『実践理性批判』で、十全に答えられたと言えるか。原理的にはそうかもしれない。しかし、具体的には実質的にはどうか？

『宗教論』における問いは、理性の具体的使用において問われざるを得ないものと言えないか。→ カントは啓蒙主義の哲学を超えている。実存哲学的。

- 1)根本悪(das radikale Böse) → 選択意志 → シェリング → キルケゴール  
 2)Idee / Ideal → イエス → 意味・象徴論 → 新カント学派を経てティリッヒ  
 3)共同性 → 道德共同体あるいは教会 → 歴史と平和論

佐藤全弘『カント歴史哲学の研究』晃洋書房。

4. カント哲学における啓蒙を超える実存的思想モチーフはどこから由来しているのか？

「カント宗教論」研究の真の問題はここにある。カントの宗教性の問い。

敬虔主義的背景はいかなる意味を有するか。

#### 5. Idee / Ideal

- Ideal の問題は、『純粹理性批判』の基盤に及ぶ。

「理想」とは理念のように単に具体化された(in concreto)だけでなく、個体化された(in individuo)存在なのである(A568=B596)。(福谷、2009、291)

福谷によれば、「超越論的理想」において「超越（上から下）と内在（下から上）」は相即する。「経験の根源は同時に「神」の根源でもある」「理性宗教論がカントにおける神の問題のすべてではないのである」(300)

- 『宗教論』（第二部、*Die Religion innerhalb der Grenzen der bloßen Vernunft*）における「イエス」の意味。

最高善（理念）の人格化（理想、Personifizierte Idee des guten Prinzips）

模範(Vorbild)としての道德律と範例(Beispiel)

Ein Ausdruck, der nicht , um unsere Erkenntnis nur über die Sinnenwelt hinaus zu erweitern, sondern nur um den Begriff des für uns Unergründlichen, für den praktischen Gebrauch anschaulich zu machen, angelegt zu sein scheint; (A60/B72)

Zu diesem Ideal der moralischen Vollkommenheit, d.i. dem Urbild der sittlichen Gesinnung in ihrer ganzen Lauterkeit uns zu erheben, ist nun allgemeine Menschenpflicht, wozu uns auch diese Idee selbst, welche von der Vernunft uns zur Nachstrebung vorgelegt wird, Kraft geben kann. (A61/B74)

根本悪の現実において、具体的にいかにして、道德的たり得るか、という問題（希望の現実性の問い）。

6. 理性宗教と実定宗教とは、カントにおいて適切に関係づけられたか？

カントもヘーゲルも、啓蒙主義・主知主義に未だ囚われている（波多野）。

↓

Idee / Ideal という問題を適切に扱いうる基礎理論・方法論が必要になる。

意味の哲学的分析（意味の形而上学）と象徴論・言語論

↓

ティリッヒ（あるいは波多野）へ

## 4. ティリッヒとカント 2

### (1) 問題設定

1. 「ティリッヒとカント」という研究テーマ：

次の三つの問題連関が重層的に含まれている。まずもっとも大きな連関は、宗教あるいは神学と哲学との関わりをどう考えるのかということ、つまり「神学と哲学」という問題であり、「ティリッヒとカント」はこの大枠の問題連関に対する典型的な事例として位置付けられる。第二のやや範囲を絞り込んだ問題連関として挙げられるのは、ドイツ・プロテスタント神学とドイツの古典的哲学（カントおよびドイツ観念論）との関係性という問題であり、「ティリッヒとカント」はこの思想史の問いを具体的に論じるための焦点となる。そして、最後のもっとも狭く絞り込んだ問題連関が、ティリッヒにとってのカントの意義、あるいはティリッヒのカント論である。以下においては、こうした三重の問題連関がすべて何らかの仕方で意識されているものの、最後のもっとも範囲を絞り込んだ問題が主な議論の対象となることをご了解いただきたい。

2. 宗教思想との関わりにおけるカント哲学の多面的な内容：

カントは啓蒙主義の哲学者ではあるが、他面、啓蒙主義を超えている。カントの影響下におけるプロテスタント神学の倫理化は、カントの一面化であった。

ティリッヒの『キリスト教思想史』(Paul Tillich, *A History of Christian Thought. From Its Judaic and Hellenistic Origins to Existentialism*, ed. by Carl E. Braaten, Simon and Schuster) のカント論：

1) Chapter II: The Enlightenment and Its Problems(pp.320-366)

A. The Nature of Enlightenment

1. Kantian Definition of Autonomy (320-325)

2. Concepts of Reason (325-330)

3. The Concept of Nature (330-332)

4. The Concept of Harmony (332-341)

B. The Attitude of the Enlightened Man (341-349)

1. His Bourgeois Character (341-342)

2. His Ideal of a Reasonable Religion (342-344)

3. His Common-sense Morality(344-348)

4. His Subjective Feeling (348-349)

C. Intrinsic Conflicts of Enlightenment (349-366)

1. Cosmic Pessimism (350-352)

2. Cultural Vices (352-353)

3. Personal Vices (353-355)

4. Progress Based on Immorality (355-356)

D. The Fulfillers and Critics of Enlightenment (356-366)

1. Rousseau, the French Revolution, and Romanticism(356-357)

2. Hume, the History of Religion, and Positivism (357-360)

3. Kant, Moral Religion, and Radical Evil (360-366)

Kant's idea of radical evil was an unforgivable sin from the point of view of the Enlightenment. Kant was attacked very much because he said this. But Kant was followed later on by several who even deepened it and carried it through to the early sources of existentialism, namely, the

S. Ashina

second period of Schelling the philosopher. Here we find in Kant a deviation from the Enlightenment that is very radical. Kant elaborated these ideas in his book, *Religion within the Limits of Reason Alone*, into a whole philosophy of religion. Or I would simply call it a little systematic theology. (363)

Thus Kant stands like Rousseau and Hume as a fulfiller and critic of German Enlightenment. His greatness is that he understood man's creaturely finitude, of course, on the basis of his half-pietistic Protestantism. The pietistic element was removed, but existentialism and pietism have much to do with each other. I am reminded of the atheistic sermon which Heidegger once gave us in his pietistic categories. (366)

## （２）ティリッヒのカント論の概要

3. 「自伝」：ティリッヒがカント（『純粹理性批判』）と出会ったのはギムナジウムの学生時代、つまり哲学者になることを志すようになった頃に遡る。

「哲学者になろうという望みは、ギムナジウムの高学年以来のものであった。わたしは偶然手に入れた哲学書を読むために自由な時間のすべてを使った。こうして、わたしはシェンペングラーの『哲学史』を田舎牧師の書棚のほこりを被った片隅に、フィヒテの『知識学』をベルリンのとある通りで移動書店のワゴンの一番上に見つけた。そしてカントのレクラム版の『純粹理性批判』を、その分厚さに心をときめかせながら、一マルクで書店より購入した。」（Tillich, 1936, 30-31）

4. ティリッヒの後期シェリングに関する博士論文の枠組み

神秘主義と罪責意識（同一性の原理と断絶の原理）の緊張関係とその統合という問題設定は、後の思想史講義で、「カントとスピノザの総合」と言い換えられるように（Tillich, 1967, 371）、カントの提起した思想的課題に対応。

ティリッヒの宗教思想の全体は、カント哲学——人間の有限性と理論理性による無限者への到達不可能性の認識——以降の思想状況において、いかにしてキリスト教神学は可能なのかという点をめぐっていたと解釈することもできる。

5. 「カント論 1」：近代キリスト教思想史におけるカントの意義を、多面的なカントの全体像に即して論じる。

初期ティリッヒにおけるシェリングについての博士論文中のカント論（Tillich, 1912, S.28-43）、カント以前の形而上学とカントとの関連性の議論、そして『純粹理性批判』（カントの認識論と限界概念としての物自体、神の存在論証批判、無制約的なものの概念）、『実践理性批判』（自律と同一性、二つの自由概念、最高善、徳と福の一致、『単なる理性の限界内の宗教』と理性宗教）、『判断力批判』（自由と必然性との同一性、美的なものとの崇高性、有機体と無機物）というカントの三批判書についての比較的まとまった論述が含まれる。

「<物それ自体>、根本悪、無機的なもの。これら三つの概念は、観念論的運動の前半においては放逐されたが、その後半においては、いっそう大きな激しさによって、軌道を突破し、理性の同一性の体系を解体したのである。」（ibid., S.43）

ドイツ観念論と関わりで、両者の共通の核（意識一般、道徳的な世界秩序、有機的なもの）と異質な志向性の両面。

後期ティリッヒのキリスト教思想史講義におけるカント論

6. 「カント論2」：神の存在論証との関わりでのカント、あるいは宗教哲学の可能性という点に集中したカント解釈。カントの批判哲学以降の思想状況における宗教哲学の可能性の問い。

1920年代になされたマールブルグ講義、後期ティリッヒの時期の三巻本の『組織神学』。

「われわれは、神の存在論証を、神についての教説ではなく、被造物についての教説のもとで取り扱っている。これは、次のような判断を含んでいる。すなわち、神の存在論証の核心にあるのは、その名称が語っているもの、神論の諸要素、あるいは神の現実存在の論証などではない。そうではなく、それは被造性の表現形式なのである。」(Tillich, 1925, S.139, Tillich, 1925/27, S.144)

↓

ティリッヒ自身の根本問題：カントの批判哲学以降の思想状況で宗教哲学あるいは神学はいかなる仕方で可能なのかという近代キリスト教思想の根本問題を直接テーマ化したもの。

7. ティリッヒのカント論：

- 1) 人間存在の有限性を論じ、神の存在論証を批判する批判哲学におけるカント（スピノザに対するカント）
- 2) 人間理性にとっての無制約的なものという理念の意義を論じるカント（無制約者の命題）（ドイツ観念論へと展開するカント）

### （3）カントと宗教哲学の可能性

神から宗教への、神の存在から人間の宗教性への問題の転換＝カントの純粹理性批判における神の形而上学的機能の人間学化」（パネンベルク）。

「われわれの経験についてこのようになされた解釈の結果は、次のようなことであった。すなわち、それまでは神思想と結びつけられ、それによって構成されていた世界経験の関連性について、今や人間の主観性の表現として、それゆえに人間学的に解釈の変更がなされたのである。」(Pannenberg, 1996, S.185)

8. 近代以降のキリスト教思想は、神の問い、超越の問いはどこから始め得るのかという点について、大きな壁に突き当たることになった。カント批判哲学の影響によって、人間の有限な理性能力では神の存在に到達不可能であるという認識（神の存在論証の不可能性の認識）が広く共有されることとなり、伝統的な形而上学あるいは自然神学に依拠した神学的思惟の基礎付けは困難なものとなった。こうした思想史的状况の一つの帰結が、先に述べた神学のカント主義といえる自由主義神学における神思想の倫理化だったのである。もちろん、こうした状況に対して、キリストの出来事における特殊啓示の事実性から議論を始めるという方向性も可能である。たとえば、バルト神学はこうした神学の典型と解することができるかもしれない。

9. 『教会教義学』は、その対象たる神の言葉の自由(Freiheit der Wortes Gottes)のゆえに、何らかの根本原理によって組織されることを自ら拒み、むしろ、自覚的に伝統的な「ロキ」(loci theologici)の方法に従いつつ、神の啓示そのものの構造に則して整序される。啓示は、しかし、神の自己啓示にはほかならないから、その構造は神の存在様式そのものに対応するのであって、したがって、三位一体的神の存在を反映する(abbilden)。そこで、三位一体論(Trinitätlehre)がこの教義学の序説を構成すると同時に、そのことによって教義組織全体

を整序することになる。」（大崎, 1992, 27 頁）

↓

啓示実証主義と批判される意味でのバルト（主観的な独断論）とは別の道。バルトが神学の倫理化を啓示の事実性において克服しようとしたのに対して、ティリッヒは存在論（人間存在についての基礎的存在論）によって同様のことを試みたい。

#### 10. 「宗教哲学の二つの類型」（1946 年）

神認識の可能性（超越への道）＝宗教哲学の可能性に関する二つの類型。

第一の類型・宇宙論的類型：経験的事実から推論によって神に遡及するという仕方における神認識の道である。その代表としては、トマス自然神学。

第二の類型・存在論的類型：「人間は神を発見するときに、自分自身を発見する」と言われるように、そのポイントは、無制約的なものが直接的に媒介なしに知性・魂の内に現れるという事態から神認識を開始すること。

#### 11. 「神は神についての問いの前提である。これが宗教哲学の問題の存在論的な解決である。神は、もし対象であって、基盤でないとするならば、決して到達することができない。」（Tillich, 1946, p.290）

cf. カントが『純粋理性批判』で行った神の存在論証に関する議論

「宇宙論的論証」は「存在論的論証」を論理的に前提としている。「最高実在性から絶対的必然性が推論され得るということが、明らかに前提されている。これは先に存在論的論証が主張した命題である。」(B635)

#### 12. 第二の類型の実例：アウグスティヌスの真理論

アンセルムス、デカルトを経てドイツ観念論に至る思想的系譜。

このように、宗教哲学の二つの類型は、通常自然神学における神の存在論証の二つの類型と言われるものにほぼ対応している。しかし注意すべきは、ティリッヒの意図が、神の存在を合理的に論証する方法の類型化にあるのではなく、神認識の可能性のあり方（神を問う問いのあり方）の類型化という点にある、ということである。ここに、カントの批判哲学以降の思想状況、つまり理論理性による神の存在論証の不可能性の承認を見ることができよう。

#### 13. 「神の存在」「我々の精神の中における神の現臨」は「あらゆる思考の前提」であり、存在論的類型は、宇宙論的類型を含めたあらゆる「宗教哲学の基礎」である、また「<神は存在そのものである> (deus est esse) という命題は、あらゆる宗教哲学の土台である」。

↓

神の存在論証とは、そもそも何か、いかに解釈されるべきか。

無制約的なもの — 実定的な宗教の宗教的象徴としての「神」ではなく、思惟する自然＝心あるいは世界概念一般と同様に、純粋理性の理念としての神 — は、確かに合理的な存在論証の事柄ではない。しかし、人間の合理性あるいは有意味性自体が成立し、根拠づけられるためには、無制約的なものが要請されねばならない、と。

#### 14. 「理性が要求するところの無制約的なものは必然的に経験と一切の現象との限界を超えることを我々に強要する」（カント）

宗教哲学の可能性として問題にされているのは、経験の一対象としての「神」ではなく、経験自体の構造において直接的に現前している無制約的なものについての気づき (awareness) なのである (Tillich, 1946, p.296)。

人間はそれ自体の存在の内に、超越的なものへの開けの可能性を有している。この無制

約的なものへと開けにおいてこそ、キリストの特殊啓示は人間の認識の事柄となりうるのである。具体的な宗教あるいは信仰は、この可能性としての開けを宗教的象徴において具体化したものと言えよう。存在論的な神の存在論証に対するカントの批判にもかかわらず、カントの議論が、積極的に、「宗教哲学の可能性として解釈できる」。

15. 「宗教哲学の道徳的類型（カントのいわゆる道徳的な神証明にさかのぼる）は、一つの新しい類型を表しているとしばしば言われてきた。しかし、実情はそうではない。道徳的論証は、宇宙論的に、あるいは存在論的に解釈されねばならないのである。それが宇宙論的に解釈される際には、道徳的判断という事実が、最高存在に至る推論の基礎となる。」(ibid., pp.294-295)

「道徳的論証が存在論的な仕方では解釈されるときには、道徳的命法がもっている無制約的な性格の経験は、直接的に、推論によらず、絶対的なものの気づき(awareness)となるのである」(ibid.,)。

16. 『組織神学』第一巻、アウグスティヌスの真理論（懐疑論に対する論駁）に続いて、次のように述べられている。

「カントも類似した仕方において、倫理的内容に関する相対主義が、倫理的形式、すなわち定言的命法に対する絶対的尊敬と、倫理的命法の無制約妥当性の承認とを前提として示した」(Tillich,1951, p.207)、「この点までは、カントもアウグスティヌスも反駁され得ない。というのも、彼らは論証していないからである。彼らはただ実在との出会いすべてにおける無制約的要素を指し示しているのである。」(ibid.)

17. 無制約的なもの、あるいは神は、最高存在や最高価値という仕方であろうと、実体化されるべきものではなく、むしろ、人間の意味経験の質として、理解されねばならないのである。道徳的判断の事実性とは、無制約的なものに対する指示機能——これは、先に「気づき」と言われ、開示と表現された事柄に他ならない——という点から、つまりその象徴機能から捉えられているのである。

#### (4) 展望

18. ティリッヒのカント解釈の意義：ティリッヒが近現代の思想状況において神や超越を問う可能性として、人間存在あるいは人間の経験自体における無制約的なものの現前という事態を位置付けたということ。とくに、ティリッヒが神の存在論証を神の存在の問題ではなく、人間存在における宗教性の問題として捉えなおした点。

19. ティリッヒ自身の宗教論——とくに後期ティリッヒの時期の『組織神学』——において、人間存在の存在構造に神の問いが内在しているという議論、神の問いは人間存在にとって本質的であるとの認識として、つまり、神の問いを人間存在の基礎構造から解明するという仕方では具体化されることになる。こうした議論の展開は、前期ティリッヒの思索において、無制約的なものをめぐる議論が、意味概念の分析（意味経験の論理的構造分析）、つまり、意味の形而上学として提示されたこととも無関係ではない。後期と前期の思索は、その定式化においては大きく異なっているものの、両者には「意味の問い」が通底しており、こうした観点によって、カント以来、キリスト教思想史において重要な位置を占めることになる無制約的なものという概念は、より明確な概念規定にもたらされたと評価できるのではないだろうか。

(1) 「宗教あるいは神学と哲学」については、次の拙論やパネンベルクの文献を参照。

S. Ashina

芦名定道 「キリスト教思想と神の問題」、日本シェリング協会編『シェリング年報』  
'02、第10号、晃洋書房 2002年、pp.59-67。

W.Pannenberg, *Theologie und Philosophie*, Vandenhoeck & Ruprecht, 1996.

(= Pannenberg,1996)

- (2) ティリッヒのカント論を理解しようとする際に注意すべき点は、カント自身とキリスト教神学における新カント学派と言われるリッチェル学派との関係を、ティリッヒがどのように論じているのかという点である。

リッチェル学派がカント哲学の一面を継承していることはもちろんであるが、本稿で論じるように、ティリッヒは、とくに宗教論に関して、カント自身の思想が神学的な新カント学派によって一面化されるよりもはるかに複雑な内容を有していることを認めていた。ティリッヒの主要な論敵は、カント自身ではなく、カント以後の思想状況の中で、神学の倫理化を推進し、神学的思惟から形而上学や存在論を放逐した、リッチェル学派であったのである。こうした考えは、次のような最初期の文献において、すでに確認可能であり、それはティリッヒの基本的立場と言える。

Paul Tillich, *Welche Bedeutung hat der Gegensatz von monistischer und dualistischer Weltanschauung für die christliche Religion ?*, in: EW. IX, S.28-34,98-102.

(= Tillich,1908)

- (4) ティリッヒ研究において、ティリッヒ思想の哲学的背景を比較的詳細に扱っている、ヴェンツやシュッスラーの次の研究書でも、カントとの関わりについては、きわめて簡単に触れられるにとどまっている — 主として、ヴェンツはシェリングについての学位論文との関連で、またシュッスラーは、学としての形而上学批判あるいは「無制約的なもの」の概念との関わりで、カントとの関係に言及している —。

Gunther Wenz, *Subjekt und Sein. Die Entwicklung der Theologie Paul Tillichs*, Chr. Kaiser, 1979.

Werner Schüßler, *Der philosophische Gottesgedanke im Frühwerk Paul Tillichs (1910-1933)*, Königshausen +Neumann, 1986.

もちろん、「ティリッヒとカント」というテーマに関わる先行研究が皆無なわけではない。オメーラは「カントの影響は、認識論についてのティリッヒの見解において顕著である」(O'Meara,1970, p.32) と述べ、このテーマの重要性に言及しており、また、トンプソンも、「哲学と神学における同時代人の多くと同様に、ティリッヒはカントとカントが提起した問題に熱中した」(Thompson,1981, p.32) とあるように、ティリッヒをカントの問題連関に位置付けようとしている。オメーラとトンプソンの研究がティリッヒにとってのカントの重要性に言及するにとどまっているのに対して、アンナラの研究は、ティリッヒの存在論あるいは神論を、「カントーハイデッガー」の連関に位置付けるといって、本格的である。

Thomas Franklin O'Meara, *Paul Tillich's Theology of God*, Listening Press, 1970.

Ian Thompson, *Being and Meaning. Paul Tillich's Theology of Meaning, Truth and Logic*, The Edinburgh University Press, 1981.

Pauli Annala, *Transparency of Time. The Structure of Time-Consciousness in the Theology of Paul Tillich*, Vammala, 1982,Vammalan Kirjapaino Oy.

以上のような研究状況は、更に近年のティリッヒ研究でも大きな変化は見られない。たとえば、次のコルトハウスの研究では、従来未刊行であったティリッヒのテキストの

最近の公刊に対応して、使用される文献の範囲はより広範になってはいるものの、「無制約的なもの」に関連したカントへの言及は、内容的に、ヴェンツ、シュッスラーらの研究を超えるものではない。むしろ、新しい展開としては、更に最近のヴェンツあるいはダンツの研究書が興味深い。

Michael Korthaus, "Was uns unbedingt angeht" – der Glaubensbegriff in der Theologie Paul Tillichs, Kohlhammer, 1999, S.42-46.

Gunther Wenz, *Tillich im Kontext. Theologiegeschichtliche Perspektiven*, Lit Verlag, 2000.

Christian Danz, *Religion als Freiheitsbewußtsein. Eine Studie zur Theologie als Theorie der Konstitutionsbedingungen individueller Subjektivität bei Paul Tillich*, De Gruyter, 2000.

(5) ティリッヒの宗教思想の基本的問題とカントとの関わりは、すでに初期ティリッヒにおいて確認できる。たとえば、「一元論的世界観と二元論的世界観との対立は、キリスト教的宗教にとっていかなる意義を有するか」(Tillich,1908, S.42-44, 107)における「二元論」を代表するのが、カントの批判哲学であることは明瞭である。

(7) 1925年のマールブルグ講義(= Tillich,1925)の内容については、次の文献によって知ることができるが、最近これに連続する1925年から1927年のドレスデン大学での講義(ドレスデン講義= Tillich,1925/27)が刊行され、より精密な校訂版が利用可能になった。今後は、二つのテキストをつきあわせた上で、厳密な議論を行うことが必要になるものと思われるが、今回は、そこまでは立ち入らずに、マールブルク講義として一括し、引用については、二つのテキストの頁を併記することにしたい。

Paul Tillich, *Dogmatik. Marburger Vorlesung von 1925* (hrsg.v. Werner Schüßler), Patmos, 1986.

Paul Tillich, *Dogmatik-Vorlesung (Dresden 1925-1927)*, in: EW.XIV (hrsg. v. Werner Schüßler und Erdmann Sturm, 2005.)

(8) この点については、次の拙論を参照。

芦名定道 「ティリッヒの根本的問いと思想の発展史」、組織神学研究所編 『パウル・ティリッヒ研究2』 聖学院大学出版会、2000年、pp.132-165。

(9) この点については、次の拙論を参照。

芦名定道 「キリスト教思想と形而上学の問題」、『基督教学研究』第24号、京都大学基督教学会、2004年、pp.1-23。

(10) こうした見解の実例としては、パネンベルクの次のバルト批判をあげることができる。

Wolfhart Pannenberg, *Wissenschaftstheorie und Theologie*, Suhrkamp Verlag 1977, S.266-277

(11) ティリッヒによる、神学の新たなカント学派における神学の倫理化に対する批判——価値概念から意味概念への転換と存在論の再評価を伴った——は、様々な箇所で行われているが、たとえば、Tillich,1967, pp.511-515などを参照。

(12) アウグスティヌスの真理論は、「わたしが欺かれるなら、わたしは存在する」(Si fallor, sum)との有名な言葉とともによく知られ、アウグスティヌス研究の中心テーマの一つと位置付けうるものである。ティリッヒのアウグスティヌスについてのまとまった議論は、アメリカ時代の『キリスト教思想史講義』の他に、1923年の冬学期のベルリン講義(Paul Tillich, *Berliner Vorlesung II (1920-1924)*, in: EW.XIII, S.475-504)をあげることができる。しかし、ティリッヒが自らの著作で繰り返し取り上げるテーマは、アウグスティヌスの真理論——懐疑論に対して、真理はあらゆる哲学の議論の前提であり、真理は神であると主張する——であり、本稿の問題はまさにこの点に関わるものと言える。

S. Ashina

ティリッヒのアウグスティヌス解釈の適切性については、以下に挙げるような専門のアウグスティヌス研究を参照することが必要になるが、おおむね了解可能な解釈と言えるであろう。

山田晶 『アウグスティヌスの根本問題』創文社、1977年、とくに139-226頁。

片柳栄一 『初期アウグスティヌス哲学の形成』創文社、1995年。

- (13)この対応関係については、慎重な議論が必要になる。とくに、次のような用語の対応関係には十分留意する必要があるだろう。まず、カントの『純粋理性批判』では、「神の存在論証」に関して、存在論的 (der ontologische Beweis) / 宇宙論的 (der kosimologische Beweis) / 物理神学的 (der physikotheologische Beweis) という区分がなされ、この順序で議論が進められる — これは、存在論的論証がもっとも根本的で、他の二つはこれに依拠するという意味であり、ティリッヒはこのカントの議論を受け入れている —。これに対して、ティリッヒが宗教哲学の可能性として論じるのは、存在論的 / 宇宙論的という区分であり — 目的論的論証とも言われる物理神学的論証が宇宙論的に包括されると考えれば、ティリッヒとカントと区分は用語レベルでは一致する —、また内容的に見て、「存在論的」の実例としてアンセルムスやデカルトが、「宇宙論的」の実例にはトマスが挙げられ得るという点でも、一見、ティリッヒとカントとは一致しているように思われる。しかし、問題は、ティリッヒの「存在論的」の中にはカントが含まれているという点である。もちろん、神の存在論証という意味での「存在論的」ということであれば、それにカントを含ませることは不可能であり — カントは『純粋理性批判』でこの「存在論的」の不可能性を論じていることから判断して —、もし、ティリッヒの議論が神の存在論証についてではなく、宗教哲学の可能性についてのものであることを見過ごすならば、彼の議論はまったく理解不可能になるであろう。

そして、さらに問題を複雑にするのは、「存在論的」と「道徳的」の関係である。本稿で指摘するように、ティリッヒが、宗教哲学の可能性としての「存在論的なタイプ」として、アウグスティヌス（真理論）とカント（実践理性批判で扱われる無制約的な定言命法）を挙げることによって、「存在論的」と「道徳的」とは結合されることになる — もちろん、本稿で示したように、「道徳的」は「存在論的」と「宇宙論的」のいずれかに解釈できる、あるいは解釈されねばならない、わけであるが —。他方、注 11 で示唆したように、存在論・形而上学と倫理・道徳（あるいは倫理化）とは対立的に捉えられており、一見すると議論が混乱しているように感じられるかもしれない。しかし、ティリッヒの意図は、倫理に対して存在論の根源性（学的議論としては、存在論は倫理の前提であり、存在論は倫理に還元できない）を主張する点にあったと考えるべきであろう。

- (15)「無制約的なもの」は、ティリッヒの形而上学の中心概念であり、まさにカント以降の思想史的文脈の中で理解されるべきものである。したがって、ティリッヒ研究でこの概念を論じた研究はかなりの数に上るが — 注 4 で扱った研究文献を含め —、ここでは、次の拙論を指摘するにとどめたい。

芦名定道 『ティリッヒと弁証神学の挑戦』創文社 1995年、111-118頁

- (17)超越的なものへの開け — これ自体は隠喩的な表現にとどまっているが — という問題は、現代の宗教哲学において、様々な論者が追求しているものであり、参照すべき議論は少なくない。ここでは、こうした問題をめぐるティリッヒの独自性として、次の点を指摘するにとどめたい。まず、注目すべきは、超越的なものへの開けの議論が、ティ

リッヒの言う存在論（人間存在の存在構造についての基礎的存在論）において遂行されており、それは「神の問い」の「可能性」として論じられている点である。つまり、これは「宗教」がいかに可能なかという点を人間（あるいは人間の経験）のあり方から解明しようとするものであり、宗教の現実性や現実化についての議論とは区別されねばならない。この現実性や現実化の問題は、啓示論あるいは宗教的象徴論を必要とするものであるが、本稿との関連で言えば、「気づき」また「開け」と表現される事柄は、いわば同一の事態（一つの出来事）—— ティリッヒの言う啓示相関 (Offenbarungskorrelation) —— の両面なのである。

- (18) 前注でも論じたように、「気づき」「開示」は象徴の問題と密接に関連している。つまり、神の問いの可能性の議論は宗教的象徴論と結びつくことによってはじめて、現実の信仰の問題（神の問いの現実性の問い）と展開されることになるのである。しかし、これによって、「宗教哲学における二つの類型」（1946年）の最後の部分においても指摘されるように（Tillich, 1946, p.299-300）、「神の問い」は、経験の自体の構造に組み込まれた直接的な確かさの領域から、不確かさ、懐疑、冒険の領域に移行することになる。こうした議論の展開は、すでに本稿でも論じた、初期ティリッヒにおける「神秘主義と罪責意識」という問題にその発端を有するものと言えるであろう。
- (19) しかし問題は、神をめぐるカントの思想全体と『純粋理性批判』との関係、つまりカントの思想は『純粋理性批判』で尽くされているのか、またもしカントの神をめぐる思索の全体という連関で見たときに、上記の通常『純粋理性批判』の解釈は十分なものと言えるのか、という点である。ここでこうしたカント論に踏み込むことはできないが、カントの遺稿 (Opus postumum) をめぐる最近の議論（福谷茂 「カントの《Opus postumum》の哲学的な位置について」、『哲学研究』第578号 京都哲学会 2004年、121-145頁）が、こうした議論を行う余地を示している点を指摘しておきたい。本稿で述べたように、一方でティリッヒは、近代キリスト教思想史を「カントとスピノザの総合」という観点から解釈しようとしているが、しかし他方、「われわれはカントとスピノザの関係をカント自身の眼を通して知るのである。カントは明らかにスピノザの実体との接近を自覚している」(ibid., 142頁) という観点から、ティリッヒの議論はもう一度再検討するに値するものと言えるであろう。